

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

JAPAN

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

Tama

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

繪本  
歎討 岩見英雄錄 四

遠  
2509  
35-4

7

11日  
遠  
2509  
35-4

繪本復仇英雄錄前編卷之三

目錄

完戸彦射神穿屋

并二十八人不負追故話

二十八人會議の事

童子而小猿を賜ふ國

城尾是之郎勧めせむる事

奸徳毒計勧酒於石見

繪本復仇英雄錄前編卷之三

完戸侯國淨鑿五儀

并三十八人不負近放活

箱塚の發効共夙夜遠近々強よく。名將の城下ハ將文官下れを多罵  
り過。例く岩見十左兵の武勇を嘆むる方もあり。又三手金の元  
若しくお負ふる五左兵。活と合は新もうちやうちれど。遂ヨ城主  
室戸姫のまゝ遙し。長臣井上邊河より更の寔正代お札を發  
ゆ。令すとせきねど井上邊河須半一。即時ヨ後者伏ゆ。豈  
十左兵の苗堂を卒成石寄る。且とも久兵元士寔代半左兵も  
箱塚より立停て。父十五生有。國主五六十代給タレ。才を奮  
大りよ發す。對人モ因縁中の若姫原よりひびき。長臣井上  
道が男威附大門をんじゆる縁の士のりを男も難可有るとあつも。

義大窪埋母傷話

若姫原吳又郎小あす園

大窪埋母傷の圖

序目

對人十分の誠友有と。上の裁許何あん心が痛うち  
所。井上が役者來て又子も詳宣知し移出事。演者  
して。もよ。もよ。而て歎一なる岩見十五萬畏りと名す。役者也  
を争ふも其者やまと。又子も上下立流え後ひての家  
末代役へ登城。詳宣所を率上へ。井上より成尾  
元彈成尾大學す。大川峰を爲せ先として。箱庭と國辛子  
及一二太人の親足と残らず云出。若逃くふ先体  
て詳宣へお詫りゆ。井上役河半を後、引峰出。其  
件のふ忽ち弁革。去れ又々箱庭ハ懲宮の事。まつて  
玉あづ方みく。田家中のあれ反そ大勢とは繩國争  
及び社地代強が。糸絣の解集代。野口由。もまた医臣

神也と發ぐれのうべ。お家往きぞ。君御と廻裁等  
死と収て。私の意故よ園幸致。此が危也。未不慮  
のひうとう。主君の御候り恆と。陳謝の筋あくを  
速ニ嘗て。舌せよじと。や後一と。ど左の總頭平治。御外  
の附言。娶ひをうひ。其家の社者委く。存まで。憚す  
事。片よ御尋。まよはじと。やまにす。井上又十を。代以せ。  
度の娘あく尋ねる。十ちく。善くやれ。而尋の如  
まゆる。十八日。社者す。翁房へ。懷三。而。尋の如  
代。通う。翁房。三原郡集の中。を社者。引。山成尾。の  
聲。身。先に。後中。着人の面。而。御家の方。を酒。あ。催  
居。二間。来。酒の間。往。まほ。や。定られ。四。社者。の家内。差

人ノ舟の侍玉びらんるをひよはは辞退ヤ是より  
は。おひはく一糸未引セモモトを付シ袖引て玉こみづ  
方へ付りとひゆ止め。心得も酒ゑ人の席へ移出ひが奉玉  
氏の舟の如し。成尾呉立昂などはら後中の諸士の子を  
達三千余人卒上より連座りて松者主へ面く。盃以ミ  
もひき。辞退仕事ともせぬ。理不至。酒と強勧られ著  
が詔町より。ひくとく。まく。かく。勅要惡口。利へ大努えてや。モ  
手こもよとせむ。己度も防ぐ。一罰卒不  
及付。委あひ玉泉のまゝ見守つて。無望也。六月  
ハさやく。一言す。も後こう。速よ五益。及へあら。モ  
天情器多うの善者也。實不感復。是る。きり。井上覆河

とを申ニ感ド。もぐ。旅采方ニ令旨。書を。夜す  
呼よセ有レと。蒙レト。下吏が。年。玉家の主。召出。セ  
十。八。九。冠年。姑。未。向。礼。其。年。六十。九。の。上。と。お。達。を  
あ。附。あ。ケ。モ。不。可。入。ロ。キ。セ。モ。玉。泉。あ。ハ。退。じ。ら。そ。成。尾。在  
彈。及。共。余。三。千。人。の。猪。ま。向。ヘ。モ。件。達。の。互。息。金。次。有  
日。に。岩。見。上。き。玉。泉。酒。沐。セ。モ。剽。ヘ。一。人。者。三。千。余。人。主。を。セ  
タ。ア。ん。ヒ。却。對。主。の。あ。よ。ガ。主。レ。是。不。法。金。礼。の。上。案。弱  
未。練。の。勅。止。言。倍。同。ヘ。ち。う。と。主。君。の。所。想。以。の。外。モ。場。内  
始。あ。き。十。九。玉。泉。が。ヤ。加。ふ。そ。以。向。う。も。ど。然。が。主。セ  
何。等。の。意。教。布。て。在。の。如。不。ほ。対。年。に。及。び。ヤ。遂。ニ。礼。以。主。之。  
先。史。と。ハ。各。安。慶。ヤ。朝。う。と。外。う。と。モ。慶。リ。れ。セ。威。も。主。之。



三十火薙廢  
辨定の件

圖



き者も毎皆赤面罵にて頗る。井上改めて山石見半  
左衛門向ひ。すりと及びてあうや。衆そんちくは歎息す。とくへ  
どと國津エ及一役ハ神也と嘆伏す。對す不憲うれしま  
きよきおれりは役ある。邸エ禁足をさむじ其件を。御様事二万  
姫憲坐勅で。隠。先今自ハ双方とも退坐す。まほの上意ばれ  
侍坐ゆと。や渡り。ちよとよう。岩見十五坐。あらはせばおのべ  
十を御と將く候。おして退坐。岩見ヨリ引く三十人  
の童ハ諸役人の思ひん。井上の思ひん。而れ憲も。と立て面の郎  
引えり。其後井上。渡河。又人の書状。主君寛を。又へ國津一許  
の姫憲言上。及。ひまく。定。まき。が。宮仕代。志。感。で。と  
其翌日岩見十を。又子威尾成。瀬大内三人を召せられ。是不候

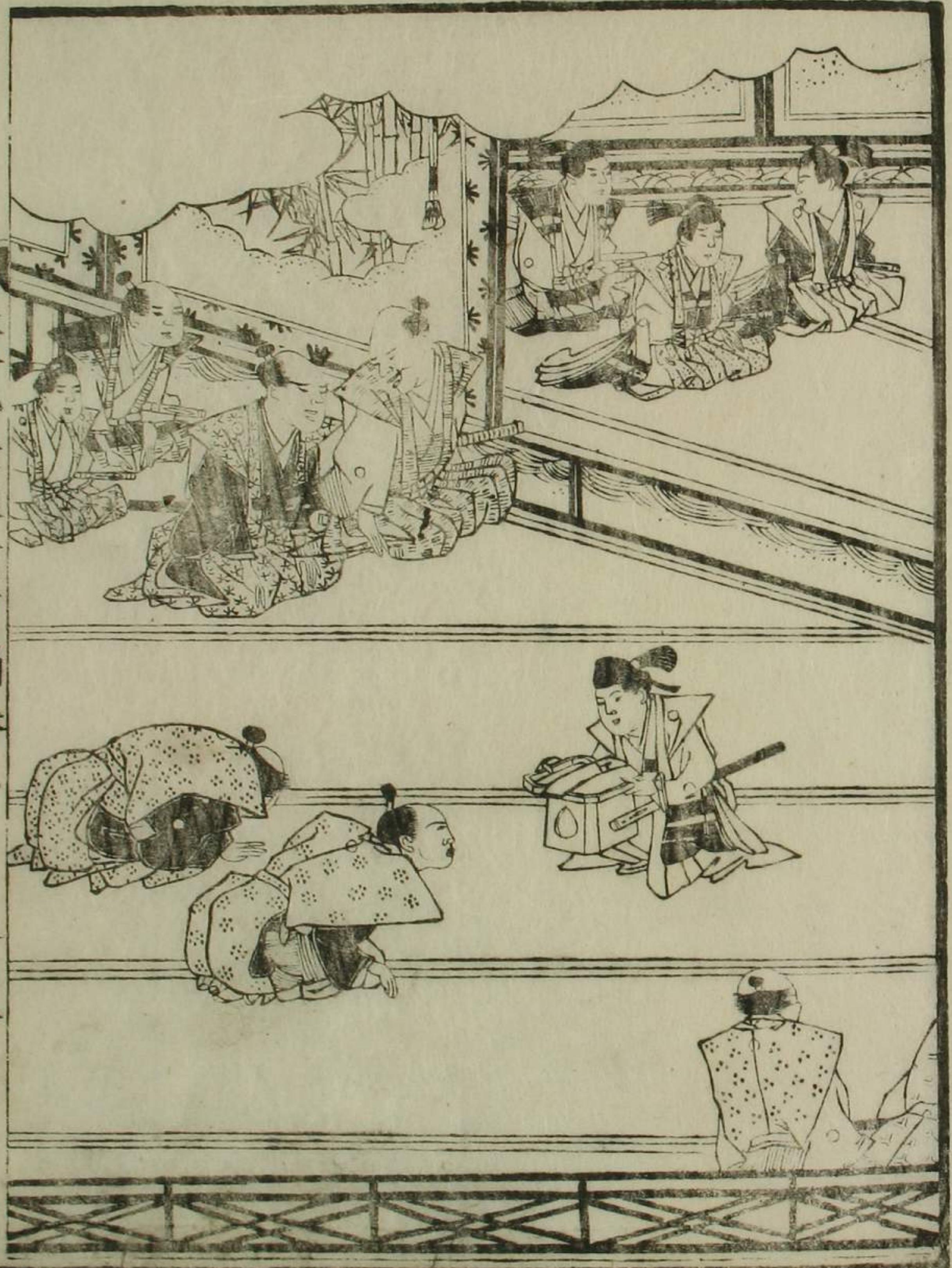
岩見又子威尾成瀬大内とも登城。大廣間。殊出ひ。其事  
安藝守辰坐席ある。岩見上を弟が召出。其人。而然不  
見。年數十五六。ふりぐども此の。五尺三四寸。白面隆鼻秀  
目。筋骨逞しく。二十歳以上と見る。骨柄うねば大いに感を。かく  
丈十を驚く。向ひ。妹が。牌十を。去。平八日。箱深。何事方。半度  
中。若者。どよ三千金。人を。對人。し。國津。及。びて。奉。て。お猪  
口。社地。び。捨。が。ヤ。と。化。れ。と。仰。す。未。ア。有。木。  
まつも。も。ア。大。勢。の。お。礼。悪。言。と。憤。怒。一。人。の。力。以  
て。多。勢。の。者。び。降。懲。で。一。柔。近。世。歸。う。或。を。雪。壯。惑  
する。に。金。う。あ。と。後。く。今。日。禁。足。行。者。一。近。習。接。ふ。あ  
立。而。又。十。や。の。宗。地。代。完。引。ふ。會。た。ち。く。し。即。ら。其。裏。

往々あくら見ゆる山在見え又子へ大りよ様び俗頭卒  
死。三村一翁内侍黒衣付は頂戴。深く君恩お謝  
奉り。又子とも面同承施。候也としてぞ退出すたうる。宴  
會又底尾底瀬大内二夫人召坐まき。休ま三人の牌ども箱浦  
八幡宮舞ましの口とも障。従縁より薦中のみ者どもと後ひ  
出。大脇斎移の酒宴。伏ろ。刻く岩見立と垂体  
又酒席に引。強て痛飲。やがて酩酊の上ふて要に難言。豪  
ヨモ一人成寝んじ却て。主をうがみよ見苦。擊拂を  
中ヨモ全廢。とまつて。玉扇の縁、然喰うが  
武のひをよ踏く。放逸情弱のひを。又拂人の喧嘩と。世子  
後指と拂ま。り矣。言語因りの向事。よそやが義名近義。

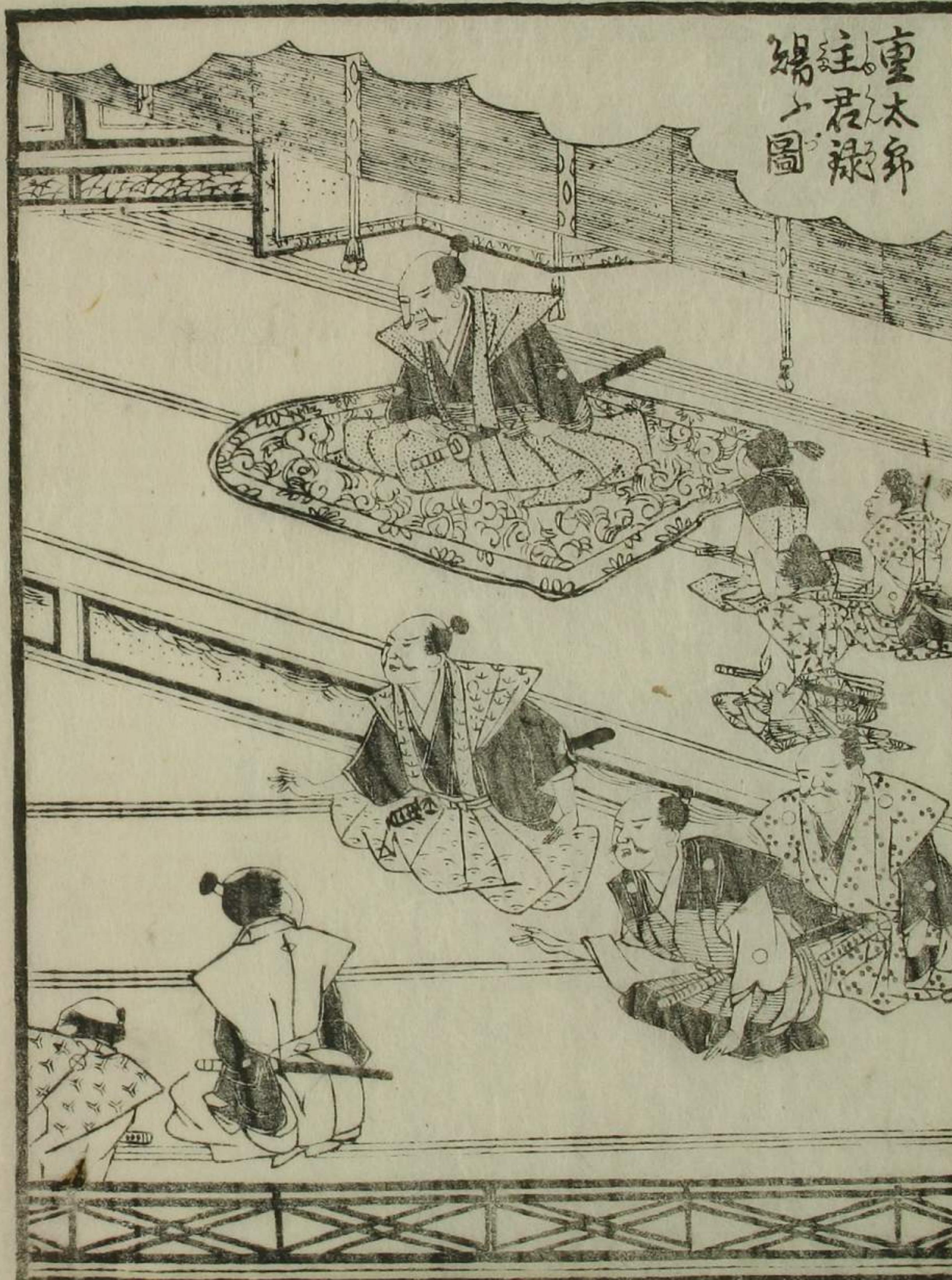
罪行甚しき。極めて重刑罪よりはまことども。  
汝おが生との軍功よしに至罪と宥ゆづれをあら  
教訓とまことわざと有りたれ吾術を勵くばたゞの私辱は重  
べれやうや苦也よむ汝すまきる過かすれども。片の不仁  
アリヌ後て辛日守内に外す。又汝おはめ三千余人の者岩見  
文字よ私ゆ。送假道にしまく不ほの差をもあそひ。意を罪  
成れず。貞きう。此者義理のためか。波でよと教まより波される  
よぞ。テトニ此よ波行と云ひ。要く。牌とまつて波謝す。猶追々  
角のどくまづく。主を私室にまづく。其中まづ麻尾虎彌ハ郎へ  
傳ふや。一子は呉五郎と面若よび半眼とあじてまふ。服でり。  
ヤチレ不外存者汝ふすま多喜も一人の。岩見守も其制も

旅りて都へ渠がみうをひそむ。撃懲をと面作よ痴とうけ。又母の送  
詔をとる人傷ち不孝跡えど。而廢めのこゑは不見ようそ  
我も今も君あつて。どう成らむ。猪さうふる。弟とて面目が失  
く門を意居の脚替と變りた。海うなまうらうのすきうへ而平せの  
家地代ね領し。と習接まわそらと文祖の英國をめぐりたり。  
併えども不らの忤をあつく更に益ある。半ば君へのや決する所  
よんを覺かで。筆する刀又手筋をわざ書室及び。永樂林義  
大りよおどろん。又人張彈が手とづく月ニハ我支拂經度。も  
在す。是が五年ゆくの脚替をす。やまとを二十九ナリ。若年まち  
と交渉とをして。あやまちうれざ。妻ハ久く床や除一此後。此  
よりは。にまをいふ間ひがひの妻ユカで。逸カ。と。洞と縁よりまちまち  
と

又翁もとよくに先師氣食清ら々へ。清懷もとよみゆけり。す。  
やまとをとおけ入の過うす。二十金人の人。一月酒。身  
上あざとまよ。そぞと生れる。四年の財のとくとく。が。  
御多射直へに。能の。あ。私をもり。何卒ゆく。付の。事へ。古安免  
止り。と。河底をと。殊りふを。能岸も。源也。もう子の。事へ。是よ  
心ひきと。兩人の。殊。言。は。ば。怒は。づ。も。不。と。れ。す。憐。う。海達  
の。殊。と。用。ひ。き。も。ひ。う。れ。と。れ。す。す。の。事。の。は。ゆ。れ。也。ま  
じ。も。ま。君。の。や。次。承。く。親。子。の。義。を。勤。勤。あ。た。と。常。刀。と。棄  
ひ。う。や。く。門。あ。す。追。拂。へ。と。向。あ。く。ひ。波。レ。席。は。離。ま。と。そ  
の。間。へ。る。是。五。年。免。の。あ。ま。す。ふ。ま。も。そ。も。も。す。能。尺。を。持。て。ま。れ  
だ。あ。又。翁。と。か。ひ。よ。と。是。う。れ。ぬ。の。と。何。と。う。ま。と。れ。を。向。り。ま



重太郎  
録上圖  
録主君



行化事左金真經卷三

7

又荒やぐ。次第に備田屋へ備田屋へ行ひ助商とある。松者が給  
家より食を差しめよとある事。けいりうでほく門へ移して松者  
よりてびし。次第に御先は木下の精良と食通をあゆ。南家の所多  
ある者とてたゞ用ひと食通をあゆ。南家の所多を感ず。先  
ちわ夜の内角をくぶ。さう松者ともお勧めほ平吉松者。や居を  
きが善きらぬとあざくちあらうが乃へ終まつさん。如何にへんを  
かくれども五ヶ日。餅うどば根じ実うちをむす。よの結  
あくとあつまが経をうごべてある伝とまよなつほ。もくろ  
高川と支分室。幼商ゆきえせおひゆるまことづれひやあ  
ゆだし。義引りうふがと又新松がと、是五ヶ日。所ちとこにあまみ  
ね徒ひて。筋あ今十をつぶあいきう布一からまく代満す。至るの此の生  
れは不自由さと付ふひき。母の慈忍社をとこう  
奸情毒巧岩見勘酒  
并大窓提刃傷活  
麻尾鹿渾が昌五郎と助商とて追お医更。昌五郎と医者とて川井。  
盛澤の川と医者とて。二金人の車船とよしと医者の傳。ああ  
長臣たる麻尾鹿渾子の昌五郎。助商有り。上方。我くども安國と片  
倉寅次郎とて。主君への事へ。麻尾鹿渾の馬をまんす。  
而肩匠とて。言ふ食ふもあらむとて皆其の子をもあらとあら

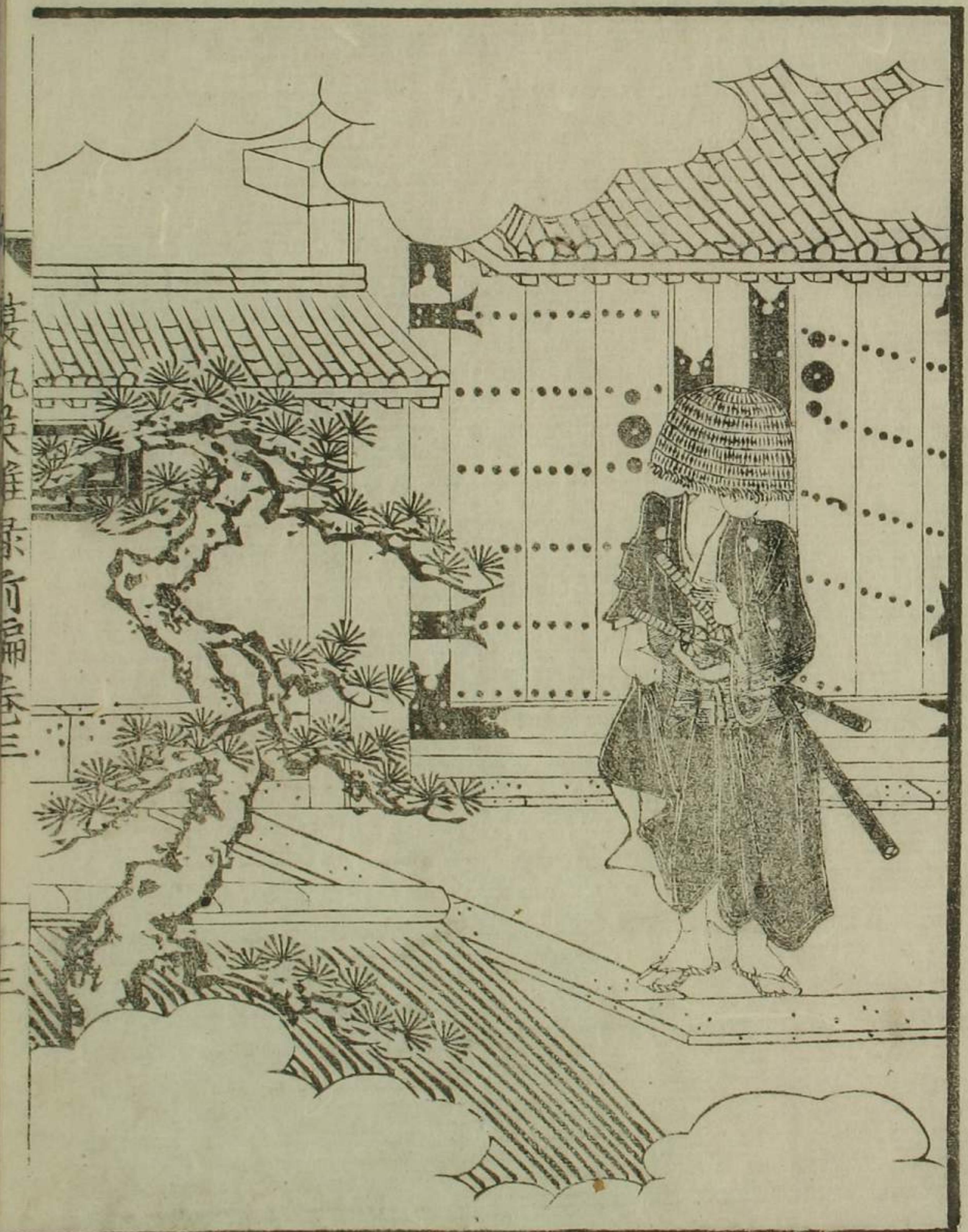
まへ。近重  
えんじゆう。はゞ三千余人の軍隊を率ひ我此かに比肩  
くとす。鷹馬をもあらずのまゝ在るの親類のみの方をとぞ  
れども既とよや食事室とさうしておそれの食事へかまふ意  
み夏まゝも出立が立此生せどもまことに如何にしてすら  
射果へ此前懷がましくさんと。三千余人の者ども財  
集金へて、岩見谷射箭會に浮候もやつてゐる  
万支不滿の強弓たる才氣昂うれども三千余人の多寡  
れども外餘壽帝の精貞も叶ひがまくわざと様成  
役り。園村よさんと其相異な案ト申すがも。未だ至  
き思ふ好計もす。ばづく少時内线送りをもす。豪傑魏三  
を簡駄耳。二三四五六蓮化蟹之舞の傳。外

おにあはれもなき徳よ中路と送りどんとま。下へ城下の町人よぬと  
よきらきと穿くうどむ。やひよ人自られが空へ。律遠まら  
えだたるより何ゑくやうか。迷懐すじづまふ空とぶ。墨あくを  
墨の旅也ふく。我よすが容見が假むと骨冷ふ微てまされざる。  
一き方假みて先達のちよくせあんよ思へども。物心うそぞす  
且我既よすが緒あ人まをう。律乗て度の老を年鑑す。そ  
我をまごつゝ御事へどもださるふ多く。近達のあひ難とも候  
と候を。不變又祥月令有ゆ。新来のふよく許と候。今集  
のえり遊。我よ少學すと不善げ如きを面令。そも我く迷惑とす  
すが見財を本す。かくら。我歎氣の麻さわとふく。老す彼  
岩す。うちの翁陰の生え衰ふ。信作御月主日と遙き草う

未皆せどとくより。後でゆくとまくひて三十人をば。歎は。すう  
かして歎へ。初よ付くまんきゆうと。又く耳法をと四不すまを  
捨。是後傳て姉もくと。廢び。半ば瓶三呑五。よ向へ假し。此す  
半不全。余人をハ至ら。びよ下と成。漱川を度す。大川御裁  
め。主兵三人の外。を捨て。よ下と。志と汗流と。申す。それらを  
勧めり。うぞ。黒みくも怪び捨て川下。亟細裁た。兩人す  
而今してをうと。公爾一合。と。不如の兩人を。何玉子  
丸とよせらる。覗三がつと。彼兩人す。某廢。深ぶく。法  
事をやじ。また。計の事。がり。行ふ。約。約。よ。空からまや。墨す  
が。が。まく。をうと。か。和連。が。すと。智。あ。月。十。ス。日。柴。奴。が。社。末  
もう。公。お。が。方。と。待。清。と。と。が。久。其。よ。約。と。す。ん。藝。ま

三十金人のうちと集会して、審行をす。今まだんを有ぐ  
うじば。何玉ももう集會をとべた。西より六うつま。大秋山の主殿う  
櫻林の主玉とそへ室をうき。窓玉の審候場所うる。ひ  
うるをぞ省く。まほはよ傍らあまほと洋美アダルトモ  
呉み昇がまく御へきのえきとう我う。大秋山へは國に里下  
あ二十金人の車八門して。其の其附ふ大秋山へは國に里下  
りきよに人義休。約と國にて坐めしときをかげ方へぞゆ  
きる。かくわざと十月十四日成なり。呉みへ毋内用ありと  
仍るもすちと歎きをと噴きうませて。大秋山へは櫻林と  
の身うなづけと遠びて。大秋山へは二十金人の義者  
乗す。集會して。呉みはせえなるゆく。呉みは風流大河に。岩見を

款じて。手附と手合。其後三十金人の者手附けられ。会川  
うやくふ姿代す。大窟ほの般森林の主よ此と處へ。岩見が  
通ひ侍うきて。うやくと持揮り。まほく義休と約定を  
固む。其數六五と立別て。をゆうる。かく翌日十五日までは  
底尾黒五感。川へ。大川他我れう。二人底の別と。おのく  
深緑笠と面。翁翁の多底前ある玉。まほく。酒肴  
分金金三テと。障子の遠間う。往來の方と持祝。おままで  
が通ひ。今やくと約定する。その八つと。正直見す。舟も  
持羽織立流す。名勝。二人の僕と。舟も連で。はのう。ゆひに。うふ。舟。  
退座ある二人の舟。舟は。舟は。舟は。舟は。舟は。舟は。舟は。  
呉みは。舟は。舟は。舟は。舟は。舟は。舟は。舟は。



豪傑全集 卷三



豪傑全集 卷三

十二

行 伊弉諾金剛經 卷三  
二  
よを付て。あらうと。連侍奉す。おもむくにじとも。要らむ。は樓主へ社奉。まの神の作。乐めあがめる。ことを。神全。うわざれ。乞難。不社内。アヒト。又華表。ゆくと。向。トカラ外。玉三事。坐よ。是成尾。至。五年。成川。ノ。五。大川。仙我。九。弃。二人。立。坐。石負。座。あづく。宿。けぢ。もと。そ。き。ス。う。ち。ア。三。人。ひ。と。ナ。ち。身。の。系。上。腰。底。坐。あ。て。頭。を。ま。げ。ス。ト。ノ。半。身。弃。生。先。底。固。の。絆。同。出。度。存。ハ。叔。は。よ。身。面。目。も。う。に。教。く。先。達。ア。高。所。あ。れ。ふ。ま。わ。る。酒。ね。よ。か。ド。と。身。よ。思。く。ね。幸。れ。と。ま。都。く。是。下。の。身。お。お。の。ド。が。う。身。達。う。ひ。よ。正。教。の。劫。あ。と。更。此。の。イ。所。も。先。淳。浪。人。と。は。し。も。是。自。身。よ。身。ま。だ。ま。い。う。そ。て。准。教。限。ん。せ。よ。あ。く。金。社。北。成。隆。一。神。界。よ。く。み。は。並。し。不。順。の。

心も滅てほむる事無し。先づ此にて人會ひ。ハ憤えく。二十七日  
未<sup>タ</sup>再び歸る。門の外すよきアラセウトと竹林寺し。今も海船  
の便びよはぬ<sup>カ</sup>。立たず。此家の主は先達の弟<sup>ト</sup>。アレ  
居外<sup>カ</sup>。是方の間氣妨ありしは我へ又支ヤセム。是ハ體之の御  
引合<sup>カ</sup>。アリ。ちよとぞ失速の懲り<sup>カ</sup>。されのつまみを乞<sup>カ</sup>。我く  
ア。萬物<sup>カ</sup>。實<sup>カ</sup>。是<sup>カ</sup>。はりやう矢羽<sup>カ</sup>。序照<sup>カ</sup>。あと。年頭虛<sup>カ</sup>  
哉<sup>カ</sup>。あらん。總<sup>カ</sup>まで言<sup>カ</sup>。体巧<sup>カ</sup>にて<sup>カ</sup>。誠<sup>カ</sup>。アリ。ナチ<sup>カ</sup>  
渠<sup>カ</sup>。お<sup>カ</sup>。毒<sup>カ</sup>。ある事<sup>カ</sup>。も<sup>カ</sup>。も<sup>カ</sup>。あり。程<sup>カ</sup>。うそ<sup>カ</sup>。まの  
ど<sup>カ</sup>。お<sup>か</sup>。社<sup>カ</sup>。も<sup>カ</sup>。も<sup>カ</sup>。三十余<sup>カ</sup>の有<sup>カ</sup>。ふ  
奥<sup>カ</sup>。お<sup>か</sup>。も<sup>カ</sup>。也<sup>カ</sup>。とつ<sup>カ</sup>。柔<sup>カ</sup>。じ<sup>カ</sup>。ユ<sup>カ</sup>。存<sup>カ</sup>。一<sup>カ</sup>。あ<sup>カ</sup>。  
序<sup>カ</sup>。お<sup>か</sup>。ア<sup>カ</sup>。が<sup>カ</sup>。う<sup>カ</sup>。が<sup>カ</sup>。頸<sup>カ</sup>。う<sup>カ</sup>。う<sup>カ</sup>。それ<sup>カ</sup>

さへと筆抄者。かねて何よりよしやと向よ。是五年。日  
室へ往還す。く季春。あはれに。迷びし。は而例まくじ。は今をほ  
うまで。はのもの。アキハヤの。臣。もうちよふ。おらひとそ、  
そん。はれりとそ。主事。あへお。うそ。うそ。うそ。  
め女。よ。茶杯。を。ぞ。お。あ。す。が。ゆ。き。そ。お。見。よ。勅。の。宿。や。る  
ま。生。列。や。如。我。く。が。主。親。の。即。あ。え。る。お。ち。く。わ。い。せ  
ゆ。く。う。ま。が。何。く。お。き。を。主。君。よ。及。び。叙。ど。と。お。も。う。不。無。教  
え。あ。あ。ゆ。う。ぬ。執。底。ア。シ。ま。と。ま。ぐ。な。や。此。ま。余。人。よ。や。エ。モ。モ。ト。  
達。も。美。承。引。る。有。ま。ぐ。な。足。下。の。山。社。茶。杯。ア。ン。更。是。幸。と。う  
き。よ。山。社。ア。リ。有。り。我。く。あ。幸。は。う。ま。ご。二。千。金。人。の。者。の。幸。来  
ま。又。我。く。執。底。ア。シ。ま。金。一。四。の。本。ま。

主席うらは法體と寫る。此が本門へ向ふもん中  
せきのうを身にじて。テ又よ額は仰く言巧よつひきま  
く。十名前ほどのくよ写し。ひそかに手紙上に主ふ不肖  
の社者と。僕ほく思ふと内訝とあれど羨りはも。及  
びそよび観どもれわ候。門序集の執事は。と。旨を  
三人たゞはば阜。事候。耳悟り。唯くとひくを  
去り。ちぢみどりく。一而の廣蓋。縦くの。竊。所。伏。きく。  
社子。取勢て。おまえ。戸人の。あよ。あたり。そぞろ。身  
ゆめ。あく。そよ。身にや。社者。ひも。は。筋。通じ。と。そ  
まん。と。と。行。が。五。名。わ。と。あ。筋。侍。ゆ。社者。ど。も。の。  
が。筋。出。氣。引。下。され。し。が。び。よ。一。き。筋。傾。り。ん。あ。う。筋。筋。

豈酒を食しに外何事も皆財産よつとす。又はまでの言  
が流し和順の盃我へ廻歎よりてたゞりが五年  
一さん頃もあつて。二人ひとしくすめと止むと六十を年も  
辞もろひ能ひと。我ばざれ高倉ゑとあづくひりと。従  
ひよよう三人候び。半もうち盃酒甚ち至る御一通。やほ  
まくわらは。ども胸よ近く。従翁我葉付運ひ半  
盃も數吸やまほ。十を尋半ひかぶんの醉ば常。今も  
盡く初めとくとく。二人教てすのと是もくう主の  
なほした酒う。之下の以後とけ。従翁の執う。やま  
んの。一もく日頃の前狗もとと今日わど。まく酒と  
否ともいひだ。おと公底等とえ辭ふとと強て押西

龜やう言ひてゆかよ。大盃以て盛付り。すまうと  
生得酒の癖あつて。強飲うとて二人のそよぎ多き。  
玉露をすの軍もく碎殺され。席上我と志をお列する。是  
前も岩見が蟹も供給。あまく蟹のあよ。多く湯が強きめらも  
是も席中少碎休。半も鳥害あらあがけ。ひそかに蟹を余下。是  
健ゆき醉休。おも此時自己もととゆめとて二つの折桂。  
仕事。おもと怪び。投足して。座ぬば思ひ出玉家のまよ酒肴  
の價と。おも怪び。おもと。是も。送足も。おもと。送足も。  
さるが。おもと。是も。おもと。おもと。是も。是も。是も。是も。是も。  
是も。是も。是も。是も。是も。是も。是も。是も。是も。是も。是も。



あぐつて。左の筋をうなぐ。右の筋をひく。何れへせうじ  
す。向ふゆきとくゆる。田のくもまきよかね。おきくさむよ  
く。筋をくわぐ。筋の破るを。よし経よわんを。よものかく。  
筋とこまくを。ほはすうと。やまとちくわねくとくら  
ぬ。ほじと。我も向うとくもくを。起とくと。體とくと。も  
う。碎体。早安ゆう。起とくと。日とくと。やう。のびとくと。  
まくとくと。昂ひは。羽織。腰と着。僕とつまと。左と右と。あ  
あ。い。持灯。持灯と。是と持て。左と右と。左と右と。左  
と右と。今と。まと。後うねり。持灯。乃がそれと。ま  
ま。それ持角。もじと。僕とくと。左と右と。左と右と。左  
と右と。馬場と。あ。い。の。まくと。天わくと。月と。

おどろき年五歳もまきがぬるも房はよだらじしとび掛かふを  
あわせ酒をまきまくとまくとて脚も浪浪もまく通へ利きをもくわく  
ほほほくまくひまくがまくわく。早大窓垣よほくうすみ。此段は朝  
小丁よ余く。左の單門右の酒門をもくも外く。樹木生る  
或の竹藪もどあくでやくも處も、懸知もくうれども大膽不敵  
もく跡の跡もあく、驚取の切合もまく縫て垣木もくばる  
に前頭の林の茂る。其と見えん者七八人此とめ熟る茶末もく  
頭よまね林のまく。雪成つて一ヶ十ちく御のけむよ。立ちゆ  
と形へよひ声をもぐんう。氣もくと被室もくぼうもは些の酒代成  
たぬりじことりくまう。僕のく成をげまく高のまくが傍うくおのと  
とじすやせとくとくもくが耳もくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくにあが。忽ち落能のトヨ魚比朴刀と振あざ。アノの如人を  
投げおる僕は。おも浦を一刀ごと切て落す。強ひハナを昇ふ  
ゆてうそをうそ。お見りをや。お延を猪で海あきを破壊する事無よ  
る。今度は完全に廢筆と岩をまきと呼ぶ。嗚呼の者をもかみ  
らぐや。虎の首を引んと後悔うさきと呼ぶ。是の利刃  
小至長光二人五寸板をもアモセモアモ向日人とぞを  
びんと。切く。轍く。及と力又ア人肩先うさるたか義家是と  
あぐら。殊の口交たふとある。あくま。十石の移ふとアモ人間の  
みゆ。三人用は。腰車血煙。もうと忽ちよ止む。サクシ追付。正  
色と大根切り。水よ。おなじよ。因どすまく後而かく。お  
のみ次やうつむけよ。敷と森とそそぎへうて。だ第人早とる處



三十八人  
皆殺の  
圖

奸徒へ此とひりどり出で、奴をうち遠あとの巻の葬代の天狗の秘密  
三人とも同様と。併及て是處の云死を賣殺人とも勝がとうと  
はすまにあら賣塗の旅。迄行あひてもうで切よきうまかと切替と  
多勢のうじて切る。若後船と不西せど、遙かとて是人刀と替  
酒く樽と外引舟とてまつてえうこ袖で引余し。筋自  
着と面紙とまざる。草斗とん是奉玉瓶三う岩見と大いに  
佐天と股の意と心へらか切て移す多勢の奴の壁伏夜盜と  
思ひの如きと三十余人の者どもうそあやうるよふ。御とく令旨  
玉ふかうて、威尾威済太川の二人勧めの執成たのもと候。威  
酒然強く碎仰。おもむろに候して去り一ハげ候。うそ侍候  
大勢とうて我が歌一付とてんぬうる事。近頃がゆつてかうと

ぞ初とぞ奸計と見る。瓶三が頭髮ねんで牢と控ば。つらや奸  
賊海三十余人の内とぞ、や後の余の消すとぞ、余貢加とまざる  
う。今彼の一件とまづ白状する所と不全とゆけ。連ぬと金瘡瘍  
と也めうえまよひ候てびんが我の力は絶交が五件と三百六十の  
室と取れども苦痛とあつむじつとやくと呼りうるま。瓶三は  
潔西と號す。近ごとてゆくと、先ゆと呼ゆわかれ。既若  
放してうじて、とてだぬれりとて、先ゆと呼ゆわかれ。既若  
是によつて、すなゆて、おまへとて、おまへと呼ゆわかれ。既若  
三時と叫び。おまへとて、おまへとて、おまへと呼ゆわかれ。既若  
計の娘未だ白状するをとが。差見逐てよ支ふまあるえ

と猶未だ。遂に泰玉が捉縛する。縛玉切付だ。死體のやうく  
り其面と楚うるを。牢にて苟延中の者ももうゐぬ。嘆息  
我言を又て高紙に筆どもの原稿が餘ひ。そぞと四つよ  
股馬とも我と暗付ふせんじ却て見苦しき死體が横しる。至  
よ天を哀れむ。我へは人と慮べた泰玉は。我よりゆふ  
あさよ樂も死んで。而陳の棺もうるべり。嘆息うみ。独立  
又泰玉の傍へ立ゆ。其金瘞骨拾ふ。高殿と右の二腕  
二ナ所の掌の汗廻らまども。奇く急いで除す。其腰も  
黒苔だ。被り云々て用ひの回生丹を含めて脱毛をもす。羽織を着  
被つて泰玉は被う。板刀をもて川を下血水アリ。洗流  
して。鞘又收り。其腰で腰を上げ。烈衣ちぢむる。待ひなう

あさよ常に被る森玉が胸も腹も小服も引抱へ送り出でて吾  
郎へ。独ゆ。折十を身へ被大板もて腰と仰て坂道を走りよう  
自殺と。脚早くまう急いで歩ひ。一日よ三十室。山川道達  
者たれを暫時よ城下よ者我郎含へ立へ。手負が在す。附  
せ。其此よ又の夜間へ手を布へ。次第に腰く力もぶ。立ちの姿  
と聲も見えず。併ち出で庭を。手負の傍へわき端は黙りて面  
仲は檢うる。夫。良と義理源をもつ特執こうれ再びあどられ  
まよ。ト僕は令して医師と連絡しよ。其仲間が家へ昇入るを  
求し。禍多き海陸も大勢とよ。うけたまた科もだよ。死をやふ已ふ  
先。纏をうち。手後宿まの頭うえ作下。我ると青絶え

縛り。一間又へとまよ着まと前提灯照る也。之をもて猪士  
頬あね縁一とが。郎へぞ拵行る

繪本復仇英雄錄前編卷之三畢

